ア　京都御苑（きょうとぎょえん）

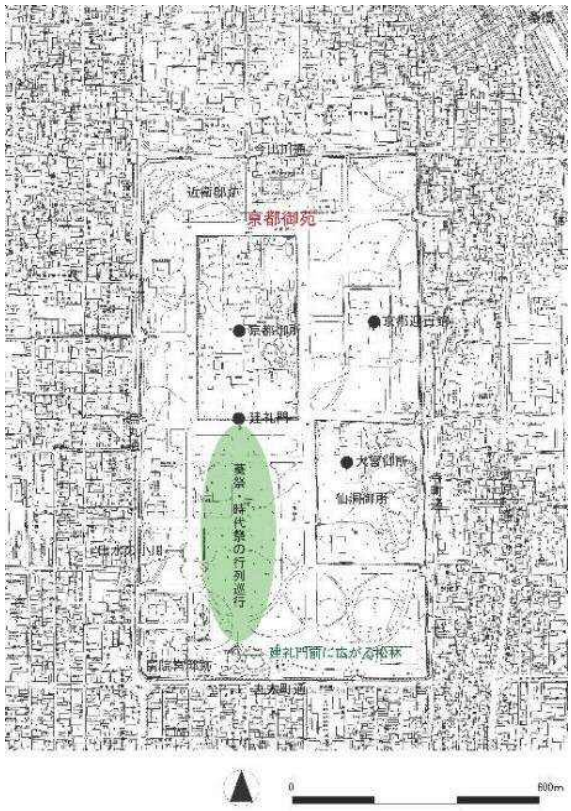

図2-33　京都御苑

(7) 京都御苑の今と昔

京都御苑は，京都御所，京都大宮御所，仙洞御所等の敷地を除いた面積約６３ｈａの国民公園で，いつでも自由に入ることができる。東西約７００ｍ，南北約１，３００ｍの広大な敷地は，江戸時代には２００もの宮家や公家の邸宅が立ち並んでいた。

平安京の内裏（皇居）は現在の京都御所から２ｋｍほど西にあったが，度重なる火災のため他の地に里内裏が置かれるようになった。現在の京都御所は，里内裏のひとつであった東洞院土御門殿に由来し，１４世紀の末に皇居に定まった。

明治２年（１８６９），明治天皇の東京遷幸に伴い，多くの公家達も東京に移住したため，明治天皇より御沙汰が下され，明治１０年に京都府がこれらの邸宅跡地の整備に着手した。整備内容は，公家屋敷の撤去，外周石垣土塁工事，苑路工事，樹木植栽等であり，明治１６年には概ね現在の状況に整備された。

この頃，京都では明治５年の第１回を皮切りに，京都博覧会が開催されていた。京都御苑においても第２回以降大宮・仙洞両御所で行われ，明治１４年には御苑内の東南の一角に常設会場が設置され，以降明治３０年に岡崎に博覧会館が建設されるまで，その場所で開催された。当時の京都御苑はこのような形で市民とのつながりを形成していた。

戦後，京都御苑は，その由緒ある沿革が尊重され，努めて現状の回復保存が図られるとともに，国民公園として広く国民に開放し利用されることとなった。その後，従来からの御所の前庭としての景観維持や都市公園的な役割に加え，大都市の中の広大な緑地としての自然環境を保全し，自然とのふれあいを推進していくという新たな役割が重視されるようになってきた。

写真2-53　開かれた門

写真2-54　御苑の桜

今日，京都御苑では，公家町が形成されていた当時からあったことを偲ばせる樹齢数百年の樹木や，整備後植えられた樹齢１３０年の木々が，歳月を経て多様で豊かな樹林を形成している。近衛邸跡のイトザクラや出水の小川周辺などのサトザクラ，ウメ，モモなどの花木，モミジやイチョウなどが季節毎に御苑を彩り，訪れる人を楽しませる。これらの苑内に生育する樹木は約５万本と言われ，苑内に生育する植物は５００種を超える。野鳥もオオタカが餌場として利用するなど１００